風俗文選通釋

十一 十二 說
十三 鮮
十四 紀記

へ利5
4218
b

門 ヘ 利 5
號 4218
卷 6

風俗文選通釋

況

十一

此風俗文通釋廿四卷
余多築地邨生駒亦
書寫之而今冊子本
官之河安政五年冬
荷田雯

風俗文通釋卷之十一
簑虫說　素堂　柴賁說　九兆
閑關說　芭蕉　師說　許六
名阿段說　許六　本導
雜說　不知作者　愛猿說　万子
忡字藤說　朱建　草芳說　露川
山芋說　吾仲　嘲霄惑說　毛紈

卷之四

說類

陸機文賦曰說煒燁而譎誑兮前事不忘後事之師
扉法子人之不惑也一也說卦解辭序
連山周易之說卦傳曰八卦之德業

蓑虫説

[illegal] [illegal] [illegal] [illegal]
[illegal] [illegal] [illegal] [illegal]
[illegal] [illegal] [illegal] [illegal]

紫賣說

此說は矢背小弥太高人の妖怪を捕へたる事の
巻の一段ばかりを說となせるなり

九郎

栃久紺屋の娘お紫と云ふ者ありしが
のけしきなり

名古屋本云矢背の里八海東の南北東西八海の北一里ばかりに
大ぶいの池の北一里ばかりに八海の里人八ツの風俗行て男女の
ごく祭ありと聞女も男の祭を見るハ始めてなりとて
今の名古屋繁昌の歌合せの歌
如高人無名高人の歌
矢背の北有の里と吟じたる古歌ハ八の
村ある故て名古屋と云ふ心なり
お紫細川てまり
小弥太の此こと矢背小弥太

東の家の知りて曰ふのいやしき官女もかくこひのかく心の泊きいとへい俗聊もうれしきをそ妹背ぶるむとさるさとなしていることを左礼言ふ法緒をもう祇陵の移統とす郭風出其東門遠曰出其東門一有女如雲雖則如雲匪我思存縞衣綦巾聊樂我員鄭遊奔の女如りて沙打作る美うて自ことを知ることをあり衣綦巾の俗美る女の多くそ甚しきをいふやと

いてをみつる楽むつ楽むつとふ

一一訪のてくうて筆交の美のゆうせんうや

閑閑説

此篇ハ芭蕉翁と淡々一閑ハなりもものさ仕ふ小文をも

如くを

名ハ居るのみつむ而てて俳も五蔵のうちふをこつてもさにふ拵てき情のおもうふ美ふ人きまぬ

そうの山の秋のかなしさ其の風のかなしさ仕ふそ

風もう人をはいうるあやもちそ仕ふひ

此一言いとを情の一端ぬつ五倫の義の甚ふきいもうの源切之帯ぬ

作三奇枝活巧ふ以て悦婦人ふ上帝弗順祝降時恙一旦天人の

悪心処ふ俳道も邪婬ふいやう知度論曰婬欲者雖不

恒衆生繋縛心故三為大罪邪婬及ひ殺生偷盗妄

語飲酒をいう五蔵そ又いもうの深し人生れぬ

そうの山のそうそ古人今巣春上つゆす

煩悩故為煩悩又曰屬嬢屬孃屬痴是名煩悩溝渠

莊周ごとき唯利害を忘却して閑まるもの
ありて友の樂ごとにはこれを莊子の遊ぶところを
もとよりこと切のごとく利害を忘却するは必ずしも
みるべからざるを知るべきなり
ゆえ孫敬杜豆の門戸を鎖してまた友もなく
閑中の書も無きを甚だ寂寞の感ありしとの
ごとく孫敬ごとくへ許六の精選の齒莽ごとく楚國先賢傳に曰
孫敬字文宝常閉戸讀書睡則以繩繫頸懸之梁上
嘗テ入市ニ市人見之皆曰閑戸先生來也杜五郎ハ杜工部
の第五弟杜豊の事ならや杜ならぬへし
ゆえや門の位

又云杜五郎ハ杜豊の事なるべきこと

師說

韓退之ハ師説を作りて者ありて
道の模倣のごとく必師ありて
又他流ハ此流ハ師ハ道ハ業ハ受ハ解ハ惑ハ
ごとくまでくく絶て他流ハ師ハ道ハ業ハ受ハ解ハ惑ハ
ごとくまでくく絶て他流ハ師ハ道ハ業ハ受ハ解ハ惑ハ
ごとくまでくく絶て他流ハ師ハ道ハ業ハ受ハ解ハ惑ハ

許六

唯一の師ありて道を受くるものなり
乞ふ世儒の発論と韓退之古の学者必有
師師者所以傳道受業解惑也云此語不甚信ずる
なり韓子の如き道徳誠意悪んぞ治国平天下の
道を業とし礼楽文章の業なからんや韓愈の如き
明師の訓練の道業自ら酔夢の業
ならざるの事し我何ぞ師を
要せざるを不審ずるものなり
如の大綱くさをもつてうかがふべし
ふるに又韓退之の祝文に曰師道之不傳也久矣欲人
之無惑也難矣云々今人の師とするに取るべき
唯一の師ありて道を受くるものなきをいふ
しかるに儒士これを知らずして我師の風俗
家ごとに道あり師ありと思ひ
しるところなり

佛道の事

佛道の事もまた神道に同じ
とふるものもまたしかるを佛
こと果ぬるを方外の
嘆じ給ふこと

高野佛子の師ある人ひそかに物語
おて云我が師ある時高野を
去ぬるに弟子数百人

名阿殴説

杜子美ノ蟇奴阿段ヲ詩ニ阿段ト云ヒ又ハ阿段ト書ル事ハ許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ也

許六

許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ又ハ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ杜子美ノ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス

抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ杜子美ノ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ又ハ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス

許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ杜子美ノ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ又ハ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス

許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ルニ依テ杜子美ノ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ又ハ蟇奴阿段ト書ルニ依テ也ト云ヒ抑許慎ノ小篆ヲ阿段ト書ル事ハ何ノ書ニ出タルヤ未タ詳ニセス

とい家信が姓解に云魯昭公以鯉魚賜孔子栄宅之児
故因以名曰鯉而字伯魚さるからいふやさ
強ひて我子の名こそ鯉魚とは
へきをやおくの如く喜物のみをもて名けおもひき
事もあるもとそさ阿陀の名仏をもて僕一女
子のみを深き心仏之名ともきこゆるそ
名すゝ陽台云朝雲暮雨道久死而実とふるも本のたゝ
俗侶の上仏ふるの人の多く名つるかそ
きゝわきそうと実志計とふもわるゝ独をおゝ物もの
名仏阿陀ゝ名つるそ杜子美示獠奴阿陀ゝ詩あり宋
蒼ゝ蒼暗曠竹筍裏ゝ細泉分卻人入夜ゝ草餘濕
雅子琴源獨不聞病渇三更回白首傳聲一注濕

青雲ゝ曽テ驚ゝ陶侃ガ胡奴異ニ牡丹常ニ守ル虎豹ノ群ヲ今
営ノ菜食ノ僧ヲ杜子ガ病渇ノ水ヲもるゝ故ニ
名ヲ負テ阿陀ヲ婦ケ杜子ガ侍ル如ノ獠奴ノ如クニ許ス
きこゝろもて其文字又其ヲ名つるや名つる設作ゝ
かゝるそゝろの事ゝこゝろを阿陀ゝ示すの結縁ゝ
杜子ノ獠奴又雅子ノ琴源ノ如くなるの物ならへ

風雅通解巻之十一終

風俗文選通釋

說解

十二之三

風俗文選通釋巻之十二

說類

出女說

木導

許多の旅の賤しき出女の吟あるを道中の法度と
り並べて客に紛らかし此役作る其人作ら
せらる

頃日頃日同じ唐人のつけるうたの
詞のやうなるきなうへ〳〵昔ふる
里の名月萬の酒食物干飯白人中
よりひたもの一枚もなくして
ふる郷のお面うへ〳〵とうたふ
事よ此唐人のやうに
ふるみやこうた

雜說

此冊は古人の偏倚なく甚好事家の珍玩とすべし
又無汚池枉死城大小無百辛八獄といふ方地獄と
云ふ事なきにや其門ごとに何の地獄と
書たるべきを此冊は不知作者

人物禽獣八其人物禽獣の形容を畫て此名目を
記すべきを其人物禽獣の形容を畫ずして此名目
のみ記して此冊の用をなさず

愛梅説

全篇説ヶ梅而無梅字終句以二梅ノ字一結之ヶ

濂渓周子蓮ヲ愛シテ居ルノ徳アルヲ以テ

比君ノ花ノ万木ニ超テ居ルヲ以テ

ソレガ愛ノ本全体ノ篇ヲ

万子

孤山のたてる碑斜なり

梅宋史林逋字君復杭州銭塘人初放遊江淮間
久之帰杭州結廬西湖之孤山二十年足不及城市真宗
聞其名賜粟帛詔長吏歳時存問善行書喜為詩
其詞澄浄峭特多奇句既就菓輒棄之既卒仁宗
嗟悼賜謚和靖先生時粟帛亦至山園少梅詩曰

衆芳揺落独暄妍占断芳情向小園疎影横斜
水清浅暗香浮動月黄昏霜禽欲下先偸眼粉蝶
如知合断魂有微吟可相狎不須檀板共金樽

林和靖孤山を張りて

山路の梅白のさきそめし

崔伯集奉和

梅うめのいろのみ

杉林の梅の花の詩まち芝蕙

山里のわらべ梅の花の咲いてるくへのそてそうん

谷の扉ふるおとすみ竹の戸梅ちらふかぜ

古今集古注の中

梅の花ちるを雪ふるとて酒をの村雪

うぐひすの神さびわたるのてい梅ぬれやすきうぐひすの

十月江南の天気酔客を

白氏文集巻二十早冬詩云十月江南天気好可惜冬来

杉(すぎ)秀(ひで)華(はな)又云此時却(かえ)テ羨閑人醉(よ)五馬無由入酒巵此結
二面影(おもかげ)ヤ江南ハ梅(うめ)ヲ
梅(うめ)ト呼(よぶ)ヘキカラシ
師(し)竜(りょう)ノ矛(ほこ)ヲ
師竜ノ矛ノ字ヲ
遍照ノ杖(つえ)ヲ皇后ノ額
按宋書武帝女壽陽公主人日臥ス于含章簷下ニ梅花落ノ
主額上ニ成ス五出之花ヲ拂(はら)ヒ之ヲ不去ラ自後有梅花粧此事
ヨリ皇后ノ梅ヲ梅花粧ト称スル
大和物語ニ知(しる)ノ
知ノ字ヲ
遍照ハ大僧正ノ
遍照ハ大僧正ノ
数珠(じゅず)十(とお)ノ
数珠十ノ字ノ
ヒラノ
ヒラノ
数珠十ノ字ハ
数珠十ノ字ハ
其実ノ
其実ノ
梅ノ
梅ノ
書(かく)ニ
書ニ
結(むすぶ)ノ
結ノ
結ノ字ハ
結ノ字ハ
梅ノ
梅ノ
天ヲ
天ヲ
梅ノ
梅ノ

山芋記

著藤和漢三才圖會云本綱薯蕷處處有之四月生苗延蔓紫莖綠葉有三尖似白牽牛葉而更光潤五月

吾仲

開花成穂淡黄色結莢成簇莢凡三稜合成堅而無仁
其子別結於一旁状似雷丸大小不一皮色土黄而肉白
此乃零餘子也 煮食甘滑與其根同霜後収其子留種成春
月来根栽種皆生也供饌則家種者為良其家種者
根如薑芋之類而極有大者一枚可重数斤生山中者根
細如指極緊実刮磨入湯煮之作塊不散味更真美食
之尤益人入薬最良名之山薬諸薬與土諸山藷玉延之
有名五雑俎云山薬原名薯蕷以避宋英宗諱改
名山薬 其種亦多

芋ハ数種あれと山中に生するは山芋と号し自然生と
称し山薬ハ同也
三才図会には根細くして指のことく極めて緊実なるとあり

是なり今云長芋にくらふれは細くかたく皮赤く味よし
名医別録に二月八月根をほりさらして是を山薬
と云虚を補ひ気力をますと云々
畑に植くまるふせてなるは津く根く咲て手細もかくなる
味も次なると

三才図会には其形種の多の根ハ薑芋の類にして大なる者
何とぞふハ色なるへしまたものにハ渾沌の言に訓とといへ
をさるにハ丸く浅く称えるかなしいふなるへし薯蕷と
つく称へいまとはそのつら別種なるへし言にハあるまじくて
一物とするなるへし
秦楚の間にては玉延といひ鄭越にハ土藷といへり杜甫か嚢中の
詩に識して陳の間謂ハ玉延の賦作る嵩山の薯蕷ハ言白然る

[illegible]
行[illegible]
世[illegible]
[illegible]
[illegible]

獲麟解解　許六

叢醫者解　汶村

解類

礼記經解の疏云解者分析之名旨細詳ゟ解釋
ゟく暁悟せしむるの義ゟ以云相違以解ととも
解の文体ゟ名付へし

獲麟解解

麟ハ仁獣ゟ王者道の行ハるゝ出ゟて魯西狩ゟ麟ゟ
ゟの事ゟ韓愈甚解ゟ獲麟解ゟ云文
甚解ゟ解解ゟ甚ゟきらひきゟく完明分析ゟ
義ゟ

魯の哀公十四年西の狩に麟を獲て
ものして春秋をつくる
魯は周公旦の封国と周室微弱となりてのち魯侯云々ま
でと哀公十四年より二百四十二年の間の春秋の世と云
春秋には魯国の記録且孔子周遊の委細一切載
載せず洙泗にて微言大義一切門人に授け
たまふ事共春秋の経とは
一切異なる独往聖賢を悪逆の輩とも憚らず哀公の
十四年春魯の西の方大野の地にて叔孫氏の車
鉏商といふもの麟を獲しといふ事を聞て孔子
不吉の事とおぼして筆を擱人と称して仲尼をもおとし
麟とは宝の一つとも云ひ此麟は
て春秋の筆をおかれしとも云ひ
ふる麟の事の始終
出ざる麟世に
即ち時の王
通ずる為のよき時なりとて
洞死孔子曰天喪予及西狩見麟曰吾道窮矣
十六年と孔子卒云ひ
就為来哉反袂拭面涕沾袍とも
しるせり切なりとぞ
麟にて筆を擱しと云ひ
支麟にて筆を擱しと云ひ
孔子の見えもいたりて
ども麟と孔子とを稱揚して韓愈の辞とも意ハ

聖人のごとく韓愈の麟解に云麟之為物不畜於家不恒有於天下其為形也不類非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然則雖有麟不可知其為麟也又曰麟之出必有聖人在于位麟為聖人出也聖人一則謂之不祥也亦宜韓愈の為不祥也麟之出不待聖人而後麟解に云麟之為物不畜於家不恒有於天下其為形也不類非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然則雖有麟不可知其為麟也又曰麟之出必有聖人在于位麟為聖人出也聖人一則謂之不祥也亦宜韓愈の為不祥也麟之出不待聖人而後

見麟の字をよみ麟風亀龍の字を麟を通して龍の字をよみ孔子の自ら麟をとらへて麟をとらへて筆を絶つといふ孔子の麟をとらへて筆を絶つといふ

いふ聖人と麟とをかねよみ

麟ともよみ

麟也道ともよむ

のよふなるものや牛馬のごとくにて聖人のよふなるものや牛馬のごとくにて聖人

うせぬ例もあるや牛馬ともに死せぬ聖人も世

なせるといふ事なし牛馬ともに死ぬ聖人も世

ごとく麟ほろぶれば聖人ほろぶ麟ほろぶれば聖人ほろぶ

ごとく麟ほろぶれば聖人ほろぶ麟ほろぶれば聖人ほろぶ

長雪隠解

長雪隠と人の狐雅公解統する処毛頭も虚妄の書ぶ
そこそこ世人ちがひ多かるべきものや

一藝の達人ハ郷言と上手解ハ名をおそれ
の事のごとし其本意ハ男女の一藝ニハつきそうもなし一藝一徳
世風雅の人ハ多くハ郷言多く
ありて万徳一藝ニハ
郷言と上手解ハ名をおそれ
五言多く郷言ハ甚不達ニして

解ハ郷言と雅言の混同より起れる誤解なり
ハ郷言ハ甚不達ニして

風俗文選通釋

記紀

十四

風俗文選通釋巻之十四

落柿舎記　去来　幻住菴ノ記　芭蕉

十八樓記　芭蕉　五老井記　許六

九華亭記　汶村　琵琶亭記　許六

風臺水臺記　許六

附紀行

鹿嶋紀行　芭蕉　南行ノ記　李由　許六

巻之五

記類

記と賦とハ共に詞章なれとも賦ハ韻語の名也
記ハ事を記したる文章也されハ記とハ事を記して詞に
まかせたる義にして又思ふ事を備ふるといふ文にて相別して

さるにより又其時々此文御と知るへし

落柿舎記　去来

落柿舎ハ去来別業の標号なり 去来姓ハ向井 名ハ義焉
通して平次郎と云 肥前長崎の人なり 彼地の聖堂の祭酒
向井玄勝か二子 都にゆきて 加茂井堂に住へ 鴨川のひかし
聖護院の傍に住し 別業を嵯峨小倉山の麓にいとなみ
柿の木を栽て 落柿舎となつく 蕉翁も閑居の節此に入り今の
落柿舎ハ明和の比重厚再興せしと云 名所図会ニ云 小倉山の
東 緋の杜のしけみ山本町にあり 支族俳士井上重厚修補し
住居して 去来ハ向井元升の二男也と云 此記落柿舎を
号せしを細に志るせしなり

嵯峨にひとつのふる家侍る 其ほとりに柿の木四十本あり 五とせ
六とせ経ぬれと 木の実を持来りて代かへさんとするものはなし
雨風に落されて王祥か志もたらす 落葉となりて鳥のはむ所となれと
天の恵のめくみもまれなりて 庭前の人ハ常ハいつみの
志らすなりぬ

此章ハ別業に柿の木ありて いまた経ぬる時のさまをいふ
なり 菓を持来らは代をと侍りきこゆれハ小 庭前の落
とらつる 晋書王祥伝ニ曰 有丹奈結実 母命守之 毎風雨
祥輒抱樹而泣 其篤孝純至如此 去来ハ此柿のゝ
雨風に落されたるハ王祥か志も取りて 此天のみたる
天あまつ民の農民の辛苦を柿をしけてならぬ事の恵ても
わすれんとや 又ハ天民の恵をいつさとするもわれらや
かくいひて庭前なと笑ひなるなり

幻住庵記

幻住庵ハ勢田橋ヨリ南ノ方山ニ入ル事五六丁ニシテ老杉森々ト生茂リ人里ヲ隔テ自然ト心閑ナル処ナリ

九月ノ二日ヨリ雨降リ続キテ山ノ気ハダヘ〳〵トシテ

曙ノ空モ見エズ

村雨ノ雲ハ高ク嶺ニ横タハリ

麓ノ雲ハ低ク垂レテ

雨モテ来ル

芭蕉

幻住庵記

幻住庵ハ勢田橋ヨリ南ノ方山ニ入ル事五六丁ニシテ老杉森々ト生茂リ人里ヲ隔テ自然ト心閑ナル処ナリ

九月ノ二日ヨリ雨降リ続キテ山ノ気ハダヘ〳〵トシテ曙ノ空モ見エズ村雨ノ雲ハ高ク嶺ニ横タハリ麓ノ雲ハ低ク垂レテ雨モテ来ル

芭蕉

[illegible]

十八楼記

芭蕉

十八楼ハ美濃の国長柄川の傍ニ有リ其ノ水積の
[illegible]

[illegible]

みなかみ川のそのみなかみ[illegible]
[illegible]
里の中ニ[illegible]
[illegible]
[illegible]

二段ありて藤鋒に花文字に勅せし詩は迎水楼匾
先得月と額せし。また此も思ひやるべき楼なりん。此楼の
前は船は長橋村より河上は湾の外に園林に松の木立し
船のかよふさま、前の網はさながら絵のごとき
又橋にし一人して前は十二三間もつゞき離れて湖水
見え無限の芭蕉葉の面より見えて絶景言はん方なし
これはまことに出世の船ならずして蓮華の上にあるここち
此所まで来たるにあらずして誰かは聞き知らんや。此の楼に登る
人は必ず芭蕉俗儒之雅言のいふ所も、げにさもありと思はれ
けれ
彼の潇湘の八の名処を西湖の十の境も涼風一味の中に
あつまりたるなり。此楼に名付けてよぶは十八楼と

いふべきなり
此あたりを見わたすの景色をもて
此楼を十八楼と名付けんとするも、潇湘の八景洞庭西
湖の十境も此楼の涼風一味の内にあれば十八楼といふ
べきなん。末の斎藤の其涼風の文を添へて

五台井記　許六

此篇許六か遊見の地五台井の事を書て山荘
湖東小野村といふ所にあり。記録集に見えたり
要は水清くしてゆるやかに流れて[illegible]
なる[illegible]流れて五台井と名つく。別荘[illegible]
五台井は主人姓は森名は許六みずから五台井のことを

湯を五老ヶ峰の別荘に驛す。不知川なる所の
山南まで十町の休暇ありて、半日の閑を領す。
雲水を持する象を見て、
水を汲みて人知れず老いぬる池をうち
叉手なれ出でて多年の憂ひを忘れ、
楚辭九歌を觀流水兮潺湲と吟じ、
湯を浴びて芝蘭の香風を沒水浴と又浴して
かしこに至り流れに臨んで別莊に野外の別。
ふ語の小雅、潛雖伏矣と云ふ潛龍のこと
亦いつや川多氏の山時甚花ありと云ふ
川又多賀川とひとしの北に小社の名又甚北に梅ありと云ふ

集り。
おとこの山ふところいで湯川と云ふ我名のごとし
まことに人のあのうらやむ
集ふ平時光
いでや川今や弥生のその山風をくみつつ
多氏の山ふもとや川の上ふもと倍ふ湯屋ふもと十旬の
休暇ふ十日の閑ふつのつ閑ふるふ漢ふり
在テ官ニ吾ニ則休暇一旬以テ洗ヒ身ヲ沐ヒ首ヲ許六十旬の
つとめの閑ふ僅の休暇ふ半日の閑ふ領し將ふ
おもふまじ東江を蕉の翁ふ五老井別墅のこと詠ふ述ふる
靈ふ水ふ浴ふ浴ふ風ふ場を坂雨ふ話しふ玉ふつの折ふ
雲ふ水ふ共ふ浴ふ風ふ場を坂雨ふ話しふ玉ふつの折ふ

清きこと惠山の泉脈を通し甚きは青別の金水に
錫杖を以て掘ると釋氏要覽に高僧隱峰遊五臺
淮西擲錫飛空而往西天といへる也扱西土建拔
西もて云ふ也東國武江の芝高岡の龍泉を西刻に杜氏
時のものゝ云ふ也隱峰の飛錫を以て名泉を出せる
也惠山の泉ハ陸羽の茶經に天下の第二泉と
名水にて蘇軾も詩を寄せ又青別の酒泉
那其水酒のごとく好き酒ありと其地名水出てそれ青別の
今亦然るや五名井の其一の泉水惠山の泉脈を通し其甘
き酒のごとくにして清きこと云ふ也
立ち去る事の名殘惜しく詩
ふべし一ツの石碑の立ちたる白敏の筆なり
霍山鳴ノ井盤の銘なり西土人の物
徳甚要廣大にして神佛のごとく
拔萬の水ものこらずして
此名又其水の用ひ白敏の事ハ江湖に
双盤の在ること神明白敏の
御酒盃を入ることを一人ならず一家を
霍山鳴ノ井盤の銘ハ其
彫鐫とりて井盤となし

一井を堀はじめて其見に初りけると云 要人の柳陰ハ新古今
集云の初部しられ
道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそ立とまりつれ
此うたの作れハふるへし 昔ハ五帝井の傍にハて堯舜井を掘て
禹のすたれさりしかハ 其のハ帝黄の時先へ掘て 吾日出て
作きは入て息ひて井にほりくのむといへる 又伯益井を作ると
いへるにしてたるへし 但井ハ黄帝の時始て掘といへハ堯の時に
始て掘るにハあらす 禹の水を治めしといへるハ禹の水を治めて
汎濫の害なきうへによりてなるへし 其のハ書の禹貢に詳也
是ハ其の泉水の汎濫の害なく 別業の利用となれはいふなるへし
後に山崎てさし 粟の園といふ 晴にのとこ 書に封して 池をきた
ゆかるし 湖水の清し 江南江北の山のうへて 古き君の日枝伊吹の嶺

此はこ上の嶺に眺て時にきて 西南の間にかゝる 園を見せ 聖徳太子の
御ところより 大上の名をこゝろにかゝる 枝に出ては 離に近き 間に
登る蔵ハ 盃（アヘモノ）とかゝけ 粟ハ茗郷に比て
此者別業の名来にいふなる 園主の御ことのは いふさき
御れ大上の名をいはれて 秋の寒き先の名もしも出されたるか
さて粟ハ園日枝伊吹比良に近し 江湖の山岡かけて名高き
所也 茗郷ハ晋宋より後 高人茶を好き 茶に茶茗郷と
いへるよし 粟ハ茗郷と比するといふハ 粟の里に茗郷によそへ
ちらしや 又ハ粟の薪にかけて 比するにや 是非此のの
なしとこゝろなるへし
柞店ハ 孫に逢ふ 三好にかけて 膝に容（スボ）め 客を主人一応に
合てらせん 茶筵五つ 枕五つ 紀主のかゝ 積るし 月に 杜能御ぞん

澤畔の梅を見て今年も亦た春の来れるを知り
本郷に入て家毎の梅を見て細雨に梅の
風情を知り五色の梅を見て梅の
此名ハ五元養の好まれたる梅の
一種なるべし
言ふまでもなく梅のさまざまの形つくりなどの
茶園今も盛に栽ゐ本庄川に橋て小十町半に行て下梅の
下を乾して本庄川の要害とする所なり作者ここに
詣着して他ごとなし
吁潜居士文雅に僻すること二十餘年ならん
梅道人の労雑を厭て幽境の芝を卜ふの風
雅に薬して世上の紛擾に染ざるの
樂樹林下濺竜
此句許子自ら得意の作にて連句の発句
瑞牆仙画ふ名ありて今存在と今庵
の之今水府小石川の梅を見て画ける馬の
楊を梅の人又名ありて楊を梅道人に贈ける
歸翮長鳴せりと是亦画を移して梅道人に贈るの
画ありて洛陽に帰るの詩ありと雪窓の芝を
五元の梅の三株四
風格のみを文画に伝ふるのみならず
して五元をはじめ
ものうち四傳の名筆
一五元の流を脚下に
樂樹林下濺竜
此句許子自ら得意の作にて連句の発句
瑞牆仙画ふ名ありて今存在と今庵
の之今水府小石川の梅を見て画ける馬の
楊を梅の人又名ありて楊を梅道人に贈ける
歸翮長鳴せりと是亦画を移して梅道人に贈るの
画ありて洛陽に帰るの詩ありと雪窓の芝を

…ふ建…ハ九華と…荀…九華山人と稱
…古今…九華と名…て…村…の名の…
…地稱…ハ…人のこと…
…帝の…を九華と名…
名付…ものを…九華…妃…神仙の名と…
上真元君…女…妃…名付…
是…仙女…微…人…
…九華山…陽縣の…
…文…九華…
…の藥方九華一會ハ王…
…魏…太極九龍…
…魏志文帝紀曰黄初七年三月築九華臺…

五月帝崩于嘉福殿九華臺ハ文帝の築…
…魏…九華殿…
殿…宮華殿…
明二帝…五龍殿…魏武帝於鄴城西北築…
三臺中…銅雀南…金鳳北…水井…皆高…丈有屋百
餘間今人但…有銅雀而不知…有三臺…也九華臺或
帝の築…
…
長恨歌…
…
…
曹…建九華殿の…
…

琵琶亭記

此亭ハ杉重氏某の別荘にして名を琵琶湖に取る。

先汶村の九華亭の湯泉を九ハ陽の桂叟之助に聞ゝ陽とゝ言ふ処ハ春ハ花の天地ニして秋ハ月の名所也。汶村の楽しむべき天地四の亭会ニ多く書ニ尽しがたし。但余ハ石山にて

今此九華亭といふ古人の名つけふるハ理有ル哉。

若夫おのれ自ら楽しむ処ハ勿論ニして

汶村みづから主人也ハ琵琶湖ニ如ハ有ル

我ゝ四桂の亭九ハ陽の桂叟ニ日月を借ンて大空九華ニ名ク

九ハ陽の桂叟ハ湖水の人異石九華

なるべし。李正臣ハ湖口の人異石九華

と名づけて壺中の九華と云。李建

勲杜荀鶴ハ皆唐人荀鶴字ハ彦之自ら九華山人と云

理有ル哉。琵琶湖ハ春ハ花の天地ニして秋ハ暁の月

の名所也。

杉重氏某の別荘にして名を琵琶湖に取る。

汶村の楽しむべき天地四の亭会ニ多く書ニ尽しがたし。

但余ハ石山にて

今此九華亭といふ古人の名つけふるハ理有ル哉。

若夫おのれ自ら楽しむ処ハ勿論ニして

汶村みづから主人也ハ琵琶湖ニ如ハ有ル

昔嘉祥の比(ヒ)貞敏(テイビン)といふ人三面の琵琶を作れる事を聞伝へて
古き記にも見えて昔より琵琶の名人多かりし
ことなり
琵琶の楽器の始まりは
詳ならず唐書楽志に曰く自下逆(サカサマ)に鼓(ウツ)曰琵(ビワト)自上順(シタヨリ)に鼓(ウツ)曰琶(ビワト)
琵琶は胡中より出(イデ)て馬上にて鼓(ウツ)ゆゑ武徳帝始て胡
人を仁明天皇嘉祥三年真敏入唐して琵琶の曲を伝へ
三面の琵琶を持(モチ)帰(カヘ)り青山郷(ミサトノ)の名器といふ事
昔が牧馬井手渭橋本繪元興寺小琵琶等名を挙(アゲ)
多物(アマタノモノ)なれど此(コノ)三面に勝(マサ)れる盖(ケダシ)真敏と作(ナス)べきなり
さて名物一面伝(ツタハ)りて好(コノ)人(ヒト)
此(コノ)三面の上(カミ)なけれども如(ゴトク)此(コノ)三面の好(コノ)名物の滅(キエ)ざる期

いつとなく好きものこれを
伝(ツタヘ)よりて好(コノ)人(ヒト)多(オホ)くなれども言(イハ)ず一面の琵琶(ビワ)なりと
嘆(ナゲ)きて琵琶(ビワ)を撰(エラ)ばしむるときは柱(ジ)よく四(ヨツ)の絃(イト)
秋のごとくなりしかども撰(エラ)ばれず
格(カク)田の古松(フルマツ)橋(ハシ)といふを二(フタツ)の月八出(デ)月入(イリ)のごとく
細(コマ)きに絃(イト)を懸(カケ)ありふる山風かまびすしく
調(シラベ)ても清(キヨ)き秋の気(ケ)なれども琵琶(ビワ)
なきゆゑ伶人(レイジン)の良材(リヤウザイ)を択(エラ)ぶごとく
枇杷(ビワ)ならでは出(イデ)ざるの音(ネ)なりと
琵琶(ビワ)を名(ナ)とせる人(ヒト)なれば
なし給(タマ)ふ人(ヒト)誰(タレ)ぞ五(イツ)葉井(ハヰ)の許(モト)を去(サ)り

風臺水臺記

許六

此篇許六又李由の客に示して
四物庵の高我と風臺水臺を築て池の水をたゝへ
呉すべき心ざしへ一言あらふ哉と
[illegible]

此紀行ハ芭蕉翁江戸深川ヨリ鹿島ヘ詣リシ時ノ紀行ニテ
故リ有テ紀行ト書ス仏ノ字ニ
治ノ皇室須ラノ國ノ乃ンテ
トヒキシ狂夫ノ昔モカクシ
思ヒシ年ヨリ住ケム
水ヨノ俗侶ノ如ク
折ニ触レ出ノ字像ノ厨ヲ
書シテ壁門ノ関モサヘ
出ヌ今ノヒトヒ侶ヲ
カヘ風ノ吹ヲ侶ヲ
行ケムヒトヒ侶ヲ
常陸國鹿島大神ハ鹿島郡ニ在リ祭神武甕槌尊

江戸ヨリ十二里ニ当ル治ノ皇室ハ貞徳ノ門人一嚢軒ノ
ヒトヒ侶ノ雅号ナリシヒトヒ侶ヲ
トヒキシ狂夫ノ昔モカクシ
定ヒシ侶ノ字ヲ史記集解皇明挙要
芳ヲハ雲心ハ水ヲ
ヒ衣ノ袋ヲ頭陀ノ袋ヲ
ヌヒ物ノ具ヲ云ヒ衣モ
雑袴ヲ云ヒ像ヲ云ヒ
中衣ヲ下衣ヲ
釋迦年尾仏ヲ
國ヲ云ヒシ
千差有路透ニ得此関ヲ乾坤ニ独歩ヒシ大地ノ人得ヒ

南行紀

李由
許六

此紀ハ許六李由伊勢参宮の紀行之許六ハ男山と云
李由ハ聖と云 江別してより南の方への旅行なれハ南行
紀と名つけ侍るへし

鳥ハ遅く生まれて蹄の色つたなし 笠ハいつゝに
まかせ雨にぬれて梅の香ハあまたゝびに会ひて住まゐ
端に入りしなるは草鞋一足なく天晴旅人の出立ハ出来たり
二月晦日といふ日に姥子の影にかゝれ名吉の玉廻より
うち出て田つらの柳本にしるみそ萱の雉子の花にさそふ
旅の心はいなりさへしも前途路遠くしを杖の頭をかしらし
前にかけ路の花の男ハ雲水の果しなき鈴鹿山の山中をたと

つゝ世をのがれハたゞこそまつる所なり 男見すミ角文字や
いせの桃園の縁やきんやとおつまやうく去山の底つくよふとき
の風呂の時しく晴に〳〵る野も紙の後ろをさめいつの
湯にて精宿る明日よりハ湯妻の留宿をさしめ相の手の事ハ
行きむ見て湯妻をつまとく廻りへしとふく書紀湯妻
男に従ひぬ

此日桑名の旅のまゝありをさして旅に入いかゝるといふ草鞋
結の事をいふ地牛の後さハ殼の事の紙云甘後宿よしなく
くるなし名吉ハ舩をてとなふ速行して陣頭をとふて
海面に廻まる矢たかる舟の鋪の五ヶ所いふるへし
前途路遠しとハ後江相云前途程遠馳思於雁山之
夕雲後會期遥霑纓於鴻臚之暁涙と賦しる詞なり

なり紀行毎に温庭均のまわり
雲母川の假橋に遊ぶかくいふ
杜牧の玄川とふ人の面もて
終くさてのおとなりうとしい
もかくのふきの洞に
あるもなれい橋の船ふ
等雑の語に従ふ動く人
杜牧や詩家屋さく
出女の雲もつ遊く
玄川の波も動く代地
蟹もかく

温庭均唐人宗飛卿并列人宰相彦博孫也高山早
くく出ること
行の詩句
晨起動征鐸客行悲故郷雞聲茅店月人跡板橋霜
槲葉落山路枳花明驛墻因思杜陵夢鳧雁滿回塘
ふりさけ見れば三笠の山に
望其間明星の如く
いでさけ見れば三笠の山に
玄川のほとりに宮川の
ふもとの人此川を水
古今集宗